

会報「人間科学」

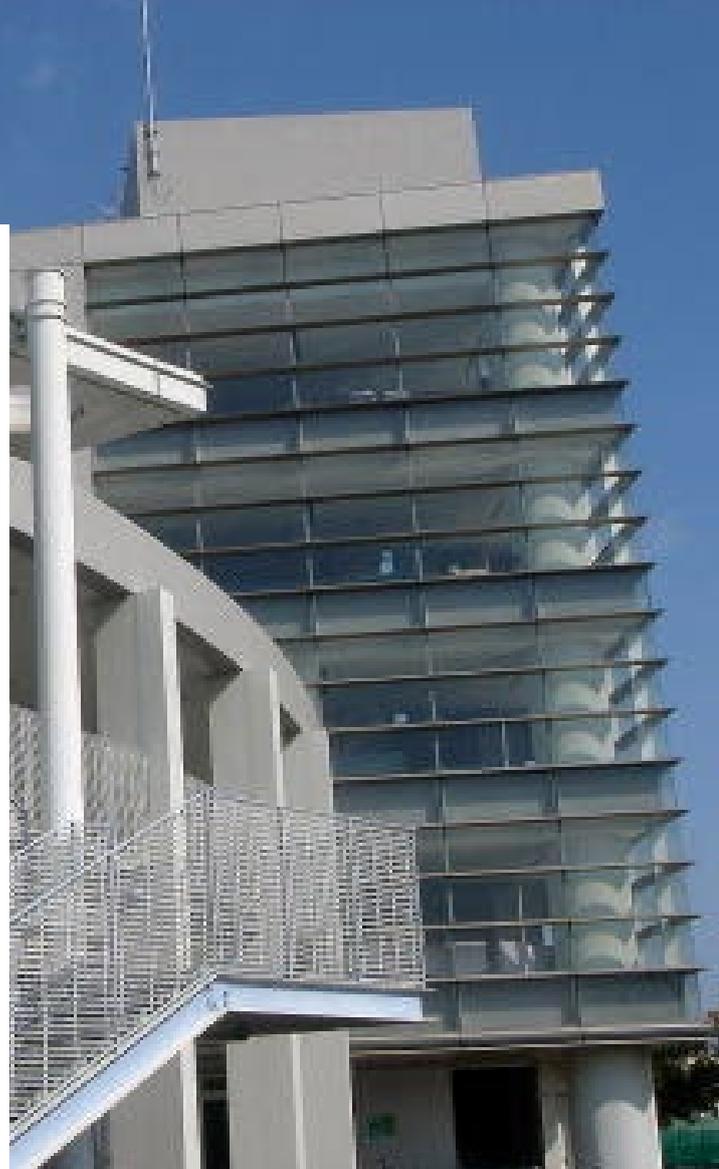
No.2(2024)

特集1：人間科学の最前線

特集2：人間科学とは何か

話題

News



Human Sciences
Intercollegiate Network

全国人間科学系部局連携ネットワーク

全国人間科学系部局連携ネットワーク参加校 (25 大学、創設年度順)

大阪大学

文教大学

早稲田大学

大阪国際大学

大阪人間科学大学

尚絅学院大学

西南学院大学

金沢星稜大学

専修大学

筑紫女学園大学

神戸大学

帝京科学大学

田園調布学園大学

筑波大学

常磐大学

東洋英和女学院大学

武蔵野大学

大阪経済大学

神戸松蔭女子学院大学

九州女子大学

東京都市大学

東北文教大学

立命館大学

島根大学

九州産業大学

目次

特集 1 人間科学の最前線

- ・「人間科学概論（入門）」担当者が感じる負担感の背景—戦後日本における「人間科学」の曖昧さについて— 常磐大学 長谷川幸一 ……2
- ・当事者の視点から科学の物語を書き換える：『発達障害の薬はじめてガイド』の挑戦
筑波大学 仲田真理子 ……11

特集 2 人間科学とは何か

- ・「人間科学とは何か？」多様性と共生のパラダイムを構築する e スクールの学び—早稲田大学通信教育課程 20 年の実践— 早稲田大学 加藤麻樹 ……16
- ・「人間を科学する／科学を人間(化)する」—再構築される「知」としての「人間科学」
東洋英和女学院大学 尾崎博美 ……18

話題：大阪大学大学院人間科学研究科が進める「DE&I 実装キャンパスプロジェクト」 大阪大学 齊藤弥生 ……22

情報：フォーラム人間科学を開催します ……29

News／編集後記 ……30

特集 1 人間科学の最前線

「人間科学概論（入門）」担当者が感じる負担感の背景

一戦後日本における「人間科学」の曖昧さについて—人間科学を考える

常磐大学 長谷川幸一

1. はじめに

「人間科学概論（入門）」は人間科学部・学科の理念・ポリシーと、組織（学科）体制・カリキュラム体系とをつなぐ重要な位置にあり、その授業内容と運営方法は「大学評価」などにおいても大きな意味をもっています。ただ、あくまで個人的な経験に基づく推測ですが、多くの大学では「人間科学概論（入門）」の担当者や運営方法の決定に苦慮し、担当者となった教員は大きな負担を感じるのではないのでしょうか。とくにオムニバス形式ではなく、計 15 回を一人で担当することになると、授業計画の策定や資料の準備などに多くの時間と労力が割かれてしまうことから、大部分の教員はできる限り担当を回避しようとすると思います。

私は、このような事態が生じる背景には、わが国における「人間科学」の曖昧さがあると考えています。以下では、わが国における「人間科学」の曖昧さをもたらす要因について私見を述べてみます。

2. 文部科学省における「人間科学」の位置づけ：「学問分類」と「組織分類」の矛盾

わが国における「人間科学」の曖昧さを端的に示しているものとして挙げたいのは、文部科学省がわが国の学問分類の概要として提示している「系・分野・分科・細目表」

（2024 年 9 月 2 日現在を参照）です。この表では、「学問分野」としての「人間科学」は存在せず、多くの大学の人間科学部・学科・コースにおいて主要な授業科目として位置づけられている「心理学」・「社会学」・「教育学」は「社会科学」に分類されています。

その一方、文部科学省『学校基本調査』の付属資料である「学科系統分類表」（2024年9月2日現在を参照）においては、実際に存在する「人間科学科」を反映して、【大分類】は「人文科学」、【中分類】は「その他」、【小分類（学科）】は「人間科学」として位置づけられています。周知の通り、1991年の「大学設置基準の大綱化」以降、わが国の大学組織は大きく変貌し、学部・学科・コースの名称もきわめて多様なものとなりましたが、組織としての「人間科学」の位置づけもその影響を受け、混乱した状況となっています。

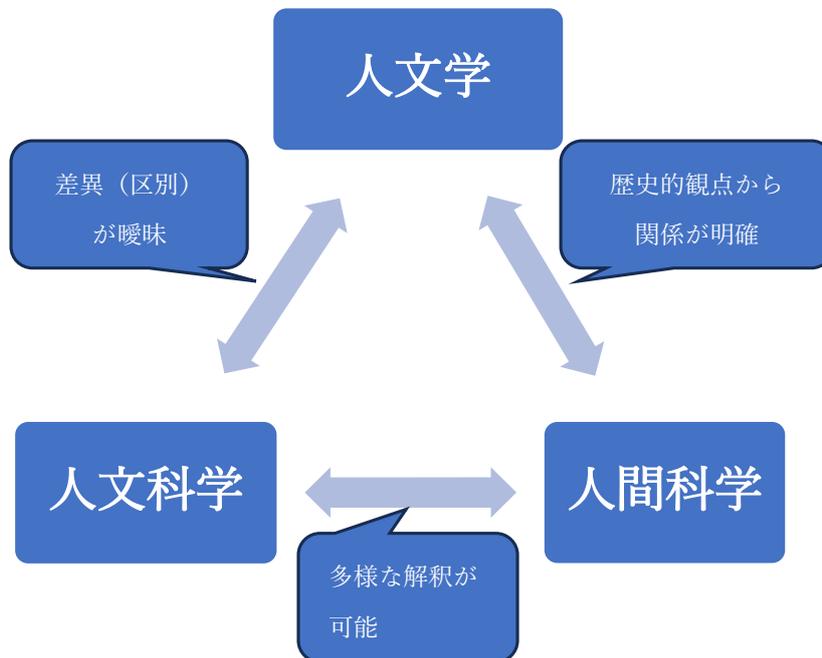
さらに、上にあげた文部科学省の「系・分野・分科細目表」と「学科系統分類表」には、もうひとつ重要な違いがあります。それは、「人文・社会科学」に関する表記が、「系・分野・分科細目表」においては「人文学」と「社会科学」とされているのに対し、「学科系統分類表」では「人文科学」と「社会科学」とされている点です。

わが国では一般に、「人文学」と「人文科学」の違いがあまり意識されることなく用いられることが多いように思いますが、歴史的に見てルネサンス期に誕生した「人文学」（humanities）とわが国固有の言葉（＝日本ローカル）である「人文科学」とはまったく異なるものであるはずで、そして「人文学」と「人文科学」との違いが明確に意識されていないことが、わが国における「人間科学」の曖昧さを招くひとつの要因となっていると考えられます。3. ではこの点を説明します。

3. 「人文学」・「人文科学」・「人間科学」：3つの術語の関係についての議論

ソシュールによれば、言語とは差異のシステム（体系）であり、ある言葉の価値（位置づけ）はそれ自体によってではなく、他の言葉との関係によって決まります。「人間科学」という術語の位置づけを考えると、「人間科学とは何か」という漠然とした問いをいくら重ねても、得られる答えは曖昧なものにしかありません。ここではまず、ソシュールの考え方にしたがって、「人間科学」という言葉の位置づけについて考えてみたいと思います。日本語における「人間科学」という言葉の位置（意味）を考えると、「人文学」および「人文科学」との関係がとくに重要であると考えられます。

図1. 人文学・人文科学・人間科学：3つの術語の関係



(a) 「人文学」と「人文科学」の関係（差異）

「人文学」と「人文科学」の表記上の違いは「学」と「科学」との差異であり、議論の焦点となるのは「科学」という言葉の意味です。明治期に誕生した「翻訳語」に関する多くの文献から確認できるのは、「科学」とは「哲学」や「個人」、「社会」とともに明治期に生まれた言葉であり、「分科（百科）の学」を意味します。19世紀の西欧では一般に「19世紀科学革命」と呼ばれる学問の専門分化と制度化が進み、それまで単数で用いられることの多かった“science”が複数の“sciences”で用いられることが通例となり始めました。それゆえ、明治生まれの言葉である「科学」はまさに、19世紀の西欧で学問の専門分化が進行した状態を表す「分科の学」という意味の“sciences”の訳語であり、“science”の訳語ではないのです（野家 2008: 36-8）。

わが国では一般にこの点についての理解が乏しく、「科学」=“science”とする理解が定着しています。「人文学」と「人文科学」という2つの術語の違いがあまり意識されることがなく用いられていること背景には、「科学」という翻訳語についての無理解が存在するように思います。

「人文学」と「人文科学」との関係について考えるさいに、もう1点取りあげたいのは、わが国の「人文科学」の組織（「人文科学研究所」と「人文科学研究科」）が、英文表記に“Humanities”を用いている点です。私が確認した限り（2024年9月2日現在）においても、京都大学の人文科学研究所を始め、九州大学大学院人文科学府、法政大学大学院人文科学研究科、学習院大学大学院人文科学研究科、東京都立大学大学院人文科学研究科などが「人文科学」に“Humanities”という英語を充てています。

その一方、国士舘大学人文科学研究科は「人文科学」を“Human Sciences”と表記しています。ただこの場合は、周知の通り、わが国のほとんどの「人間科学」の組織が“Human Sciences”という英文表記を用いていることから、両者の差異が問われることとなります。

(b) 「人文学」と「人間科学」の関係

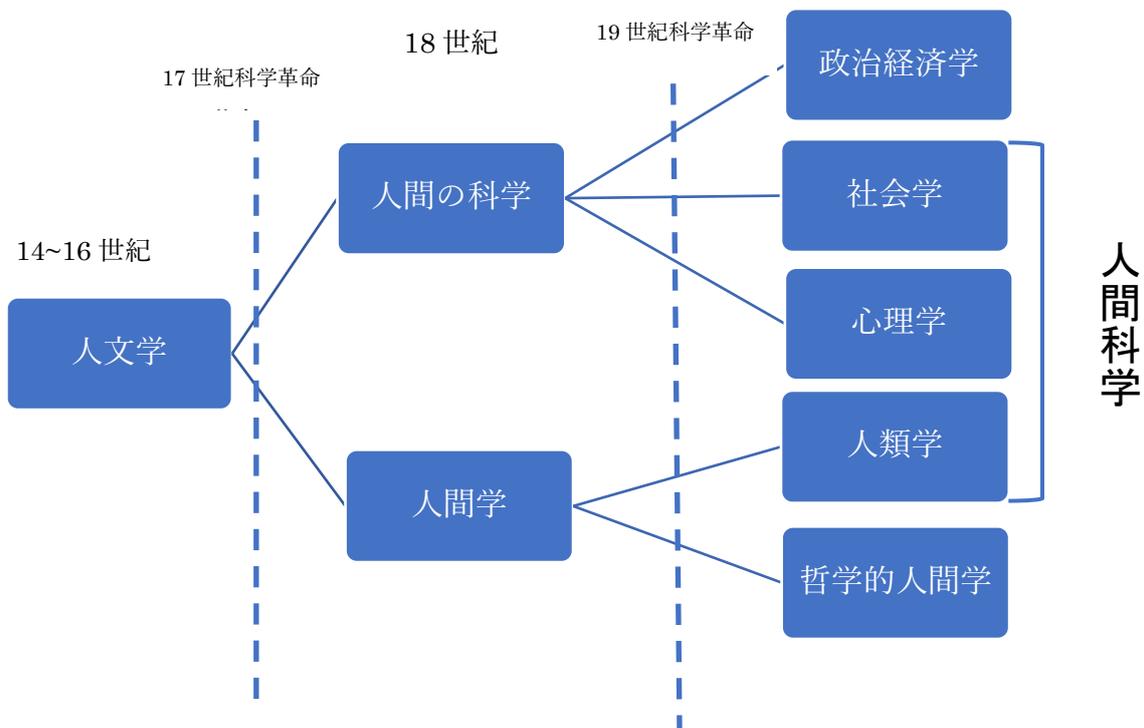
「人文学」と「人間科学」の関係は、人間に関する学問の歴史的な変容という観点から明確に説明可能です。この点については、「図2. 人間科学の歴史（ルネサンス期から19世紀まで）の図式的理解：「人間科学」を歴史的な文脈から理解するための見取り図（試案）」に基づき説明します。およそ400年にわたる人間科学の歴史を図式化したものなので、抜け落ちてしまう事柄も多くなりますが、「人文学」と「人間科学」の歴史的関係について考えるための「理念型（モデル）」として理解していただくようお願いします。

ルネサンス期に誕生した「人文学」（humanities）が展開した「人間性」（humanity）に関する議論は、「人文主義者」としての側面をもちながらも「機械論的唯物論」を展開した「17世紀科学革命」の主要な担い手のひとりであったホッブズ（Th. Hobbes, 1588-1679）によって「人間の自然本性」（human nature）に関する議論へと転換されました。18世紀になると、ホッブズを批判的に継承したヒューム（D. Hume, 1711-76）が『人間本性論』（1739-40）において、「論理学」、「道徳学」、「批評学」、「政治学」から成る「人間の科学」（science of man）の構想を提示しましたが、このヒュームの言う「人間の科学」こそが、現代の人間科学（human

sciences) の源流であると考えられます (徳永 1989 ; 奥谷 1997 ; 田畑; 2004) 。

ヒュームの「人間の科学」は、カント (I. Kant, 1724-1804) の「人間学」 (Anthropologie) やアダム・スミス (A. Smith, 1723-90) の「政治経済学」 (political economy) に大きな影響をあたえ、それが一般に「19 世紀科学革命」と呼ばれる「学問の専門分化」と「制度化 (学会や学部・学科の誕生)」によって、「政治経済学」 (後に「政治学」と「経済学」)、「社会学」、「心理学」、「人類学」として独立していったと考えられます。したがって、「人間科学史」と「社会学史」、「心理学史」、「人類学史」との接点は 19 世紀にあるので、今後、その点をより詳細に検討していくことが必要であると思います。また、このような歴史的な理解に立てば、わが国の多くの「人間科学部」において主要な学問・学科として位置づけられている「社会学」と「心理学」と「人間科学」との関係性もより明確なものとなるのではないのでしょうか。

図 2. 人間科学の歴史 (ルネサンス期から 19 世紀まで) の図式的理解 : 「人間科学」を歴史的な文脈から理解するための見取り図 (試案)



(c) 「人文科学」と「人間科学」の関係（差異）

(a)で見た通り、「人文科学」という術語は日本に固有の学問史から生まれた言葉であると言えますが、この点が明確に意識されていないことから、「人間科学」との関係をめぐって術語（翻訳）上の混乱が生じていると考えられます。

その例として挙げたいのは、フーコー（M. Foucault, 1926-84）の“*Les mots et les choses: une archéologie des sciences humaines*”（1966）の邦訳『言葉と物』（1974）のサブタイトルが「人文科学の考古学」とされていることです。フーコーはこの著作において、ルネサンス・バロックから古典期、近代への「認識体系」（*épistémè*）、つまり「物事と言葉のあいだの規則」の転換に着目することで、“*sciences humaines*”の誕生と変容について考察しました。フーコーが“*sciences humaines*”を構成するものとしているのは、「心理学」、「社会学」、「文化史」、「思想史」、「科学史」であり、さらにこれに加えて、「精神分析」、「文化人類学」、「構造主義的人類学」が含まれると述べています。これらの学問は人間の有限性そのものを対象とするのではなく、人間の活動メカニズムがいかんして生まれ、展開されるかを明らかにしようとするものであるとしていることから、フーコーの言う“*sciences humaines*”は、現在わたしたちが用いている意味での「人間科学」と同じものであると理解できます。

また日本ではあまり知られていませんが、ストラスブール大学教授を務めた哲学者ギュスドルフ（G. Gusdorf, 1912-）の“*Les sciences de l’homme sont des sciences humaines*”（1967）の邦訳が『人間の科学と人文科学』（1976）とされていることも同じような例であると言えます。

4. 翻訳語の対応表に関する私見

3. で見たように、わが国では術語としての「人文学」、「人文科学」、「人間科学」の関係はきわめて曖昧です。その曖昧さは明治期以来のわが国の学問が西欧の学問の翻訳によって始まったということに起因すると考えられます。

表1. は、「人文学」・「人間の科学」・「人間学」・「人類学」・「人間科学」の用法に関する私見です。3. で見た通り、「人文科学」という言葉の存在が「人間科学」という言葉

の意味を曖昧にするひとつの要因であることは明らかです。言葉の用法は時代的に変化していくものですが、「人文科学」という言葉は徐々に使用されなくなっていくのではないかと推察します。

表1. 人文学・人間の科学・人間学・人類学・人間科学の用法についての私見

日	人文学	人間の科学	人間学・人類学	人間科学
英	humanities	science of man	Anthropology	human sciences
仏	—	science de l'homme	Anthropologie	sciences humaines
独	—	Wissenschaft von menschen	Anthropologie	Menschenkunde

5. 結びにかえて：人間科学系部局のミッションについて

本稿では、わが国における「人間科学」とその組織（大学院・学部・学科・コース等）の曖昧さが生じる要因について、「人間科学」と「人文科学」・「人文学」との関係性、および欧米語との整合性という観点から考察を行いました。ただ、「人間科学」という学問の意味を明確にしようとするさいには、本稿で提示した観点以外にも、さまざまな観点・考え方が存在するはずで

その中でもとりわけ重要であると思われるのは、「日本に固有の人間科学」を構想するという考え方です。確かにそのような観点からの試みは過去にも存在しました。その代表的な例は、第4期学術会議（1957-60）が日本独自の人間科学の組織として構想した「人間科学総合研究機構」の設立計画です。この計画案は、目標予算50億円の壮大なものでしたが、実現することはありませんでした（日本政治学会人間科学委員会1965: 274）。ここではその詳細について触れることはできませんが、今後、わが国における人間科学の組織の存在意義を確かなものとするためには、「日本独自の人間科学の

組織」という構想がなぜ頓挫してしまったのか、について再検証してみることが必要であると思います。

「人間の終焉」といった事態までもが議論されるようになった現代において、「人間に関する学問」である「人間科学」が担うべきミッションはきわめて重要なものであるはずで
す。「人間」を生物進化の法則から逸脱したものに変わってしまいかねないバイオテクノロジーや最先端の医療として注目されているサイボーグ技術（人間と機械の融合）、あるいは日常生活や労働のあり方に大きな変化をもたらし始めている生成 AI、これらの開発をどのように進めていくべきなのかという問題は明確な回答を示すことが難しい道徳的な判断を迫るものでもありますが、人間科学の組織にはそれらの問題を考えるための多様な知見が蓄積されていると考えられます。今後、人間科学の組織にとって必要なのは、人間科学が担うべきミッションを組織の成員が共有するとともに、それぞれの分野の多様な研究成果を総合し連携するための体制を整備していくことであると思います。

[文献]

Foucault, M., 1966, *Les mots et les choses: une archéologie des sciences humaines*, Paris: Editions Gallimard. (渡辺一民・佐々明訳, 1974, 『言葉と物——人文科学の考古学』渡辺一民・佐々木明訳, 新潮社.)

Gusdorf, G., 1967, *Les sciences de l'homme sont des sciences humaines*, Paris: Ophrys.

(片山寿昭訳, 1976, 『人間の科学と人文科学』法律文化社.)

長谷川幸一, 2022, 「人間科学の歴史序説(1)——人文学・人間の科学・人間学(人類学)・人間科学: 人間に関する学問の変容」常磐大学人間科学部紀要『人間科学』40(1): 11-29.

—————, 2023a, 「戦後日本における『人間科学』の曖昧さ——文献と組織の検討」常磐大学人間科学部紀要『人間科学』40(2): 1-22.

—————, 2023b, 「人間科学の歴史序説（2）——19世紀における『人間の科学』・『人間学』から『政治経済学』・『社会学』・『心理学』・『人類学』への専門分化と制度化」常磐大学人間科学部紀要『人間科学』41(1): 15-30.

—————, 2024, 「人間科学の歴史序説（3）——構造主義とシステム理論：20世紀中葉における新たな総合の試み」常磐大学人間科学部紀要『人間科学』41(2): 1-16.

文部科学省研究振興局助成課, 2009, 「系・分野・分化・細目表」, 文部科学省ホームページ, (2024年9月2日取得,
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/attach/1337808.hth)

文部科学省総合教育政策局参事官（調査企画担当）, 2005, 「学科系統分類表 1 大学（学部）」, 文部科学省ホームページ, (2024年9月2日取得,
https://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/05122201/006/004/001.htm)

日本政治学会人間科学委員会, 1965, 「『人間科学総合研究機構』設立計画をめぐる動向について」『年報政治学』16: 272-84, (2024年8月11日取得,
https://www.jstage.jst.go.jp/article/nenpouseijigaku1953/16/0/16_0_272/_pdf/-char/ja) .

野家啓一, 2008, 『パラダイム革命——クーンの科学史革命』講談社.

奥谷浩一, 1997, 「人間科学の系譜と方法の問題」札幌学院大学『人文学会紀要』60: 71-91.

田畑稔, 2004, 「人間科学の概念史のために」『大阪経大論集』54(5): 99-129.

徳永恂, 1989, 「人間科学とは何だろうか——ゆらぎの中での自己反省と自己組織化」『大阪大学人間科学部紀要』15: 1-19.

当事者の視点から科学の物語を書き換える：『発達障害の薬はじめてガイド』の挑戦

筑波大学 仲田真理子

1. 「発達障害の薬はじめてガイド」とは

「発達障害の当事者とまわりの人の薬はじめてガイド」（以下「薬はじめてガイド」）は、神経発達症の当事者に向けて書かれた通院・服薬に関する理解促進パンフレットである。2021年11月に神経発達症の当事者である筆者、仲田が、神経発達症のある家族をもつ瀬戸川（富山大学）と一緒に、専門病院である中川の郷療育センターの施設長・許斐医師の監修のもと制作・発行した。PDF ファイルを配信するだけでなく、複数の財団や大学からの助成や、クラウドファンディングによって資金を得て紙の冊子を印刷し、全国に無料で配布している。冊子の発行部数は5万部を超えた（2024年10月現在）。

パンフレットには、薬が作用する仕組みや、服薬時の注意事項に関する説明、神経発達症に使われる薬の簡単な紹介、漢方薬やサプリメントとの付き合い方、医師・薬剤師を含めた医療者とのコミュニケーションのコツ、困りごとを伝えるときに役立つ「専門用語解説」などが掲載されており、いずれも神経発達症の当事者を読者として書かれていることが特徴である。なお、「発達障害」という呼称の普及度を鑑み、「薬はじめてガイド」では神経発達症ではなく、発達障害という呼称を採用している。そのため、本稿においても以降は発達障害と呼ぶことをお許しいただきたい。

私が「薬はじめてガイド」を作ったきっかけは、研究室で一緒に働く後輩から「発達障害でこれから服薬を開始するのだが、薬のことが分からなくて不安だ」という相談を受けたことであった。自治体や製薬会社が疾患の啓発パンフレットを作っていることを知っていた私は、最初それらの中からニーズに合う物を選んで説明しようと思い、検索をかけた。そこで愕然とした。都道府県の数よりも多くある発達障害啓発パンフレットのほとんどすべて（2020年当時）が発達障害のある本人ではなく、発達障害のある子どもを持つ保護者に向けて書かれていたのだ。内容も家族などによる生活上の支援のやり方が中心で、

医療について解説した無料のパンフレットは見当たらなかった。当事者が使いやすいパンフレットがないなら、自分の手で作ろう。これが「薬はじめてガイド」を作った動機であった。

2. 苦しみに寄り添うことと自尊心を守ること

現在、「薬はじめてガイド」は当事者だけではなくその家族や支援者にも広く使われている。さらに、医療職や心理職を育成する教育機関からの請求も少しずつではあるが増えている。教材としてパンフレットを読んだ学生からは通院・服薬そのものについての感想のほかに「やさしい文章だと思った」「当事者の人権について考えた」などのコメントが出ていると聞いた。

多数派の視点だけではなく、少数派である当事者からの視点も取り入れ、フラットな文で、誰もが安心して読める医療の物語を作りたい。このような「薬はじめてガイド」の基本的なスタンスは、監修の許斐医師と私の5年間にわたる対話のなかから生まれたものである。許斐先生は私の主治医で、私は「薬物療法が非常にうまく行っているケース」だったらしい。許斐先生も臨床に移られる前は神経科学のバックグラウンドをもつ研究者であったことから、診察時間にどうしたら薬物療法がうまくいくのかについて語り合うことがたびたびあった。本人や周りの人がある程度の知識を持つこと、そして自分の状態を表現できるようになることが重要なのではないかと、そう語り合ったものの、当時の専門的な書籍は一般市民には難しすぎたし、発達障害に対するスティグマを惹起するような表現、例えば「社会的コミュニケーションおよび対人的相互反応における持続的な欠陥」(自閉スペクトラム症の診断基準より, DSM-5-TR 精神疾患の分類と診断の手引き, APA, 2023)なども多く含まれていた。医学的な診断がスティグマを付与されるイベントではなく、新しい生活への希望の幕開けとなってほしいという願いは、許斐先生と私の共通のものであった。特に、私自身が研究者としてこのような医療の言説に触れたことで人と関わる意欲を失った経験があり、同じ経験をほかの人にはしてほしくないと思ったことが「物語を書き換える」ことへのモチベーションになった。

しかし特定の個人ではなく一般的な当事者を対象として書こうとすると、なかなか難しかった。もちろんネガティブすぎる描写は絶望を与えてしまうが、困りごとのどん底にいる人間にとってはポジティブな描写を受け入れることもまた難しいからである。障害についてポジ

タイプに語る言説として「障害は個性だ」という表現がある。これは、発達障害とうまく共存して、ある程度元気に暮らせている人にとっては正しいのかもしれない。でも、発達障害特性によって生活が立ち行かなくなり、困って困って困りつくした果てに病院に通い始めたかつての自分は、とてもそんな表現を受け入れる気持ちにはなれなかった。気休めで救われるなら、そもそも病院には行かないのである。障害当事者を憐みの対象、かわいそうな犠牲者として書くことは差別的であるが、発達障害の特性によって被る大きな不利益を無視して、単なる個性であると断定したり才能として称揚したりすることもまた、弱っている人にとっては攻撃的にすら感じる。困っているという事実寄り添いながらのエンパワーメントが必要だった。

さらに、既存の医療の物語から完全に逸脱して、ゼロから言説を創ることもできなかった。文字で書かれたパンフレットであるから、読者は文章を読むことがある程度得意な人々である。そのなかには、すでに自分の障害のことを勉強して、医学的な言説を深く内面化している読者が多くいることが予想された。そこで現存する医療の物語にある程度準拠して、しかしそこから侮蔑的な表現は取り除き、当事者の視点からの描写を足すことにした。多数派の視点とは別の見方をパンフレットに掲載することで、既存の医療の物語では主体となりえなかった私たち障害者が、自分たちの物語を紡ぐ語り手となる未来を提示したかった。

発達障害の診断がついた後、2年にわたってふてくされていた私を救ってくれた1冊の本がある。2013年に発行された「ボクの彼女は発達障害」というコミックエッセイで、著者であるくらげさんとパートナーであるあおさんとの生活を、くらげさんの文章と寺島ヒロさんの漫画で、梅永雄二医師の監修のもとコミカルにつづったものである。

大学の書籍部で手に取ったその本が、私の初めて読んだ「発達障害の解説本」であったことは、今にして思えば人生最大の幸運の一つであったと言っていいと思う。パンフレットを全部描き終わった後、もう一度この本を手に取って、偏見やスティグマを含まないフェアな描写と、発達障害特性を嘲笑または自虐する表現がないことに驚いた。今の私にはそれがどれほど大変な仕事の積み重ねでできていたのか、少なくともある程度は推察することができる。初期の発達障害ブームの中にながら、私が自分の性質についてある程度フラットにとらえ、侮蔑的な表現に腹を立てることのできる健全な自己肯定感を持ち続けること

ができたのは、道を切り開いてくれた先人たちの仕事のおかげであろう。もし最初に読んだ解説書が、当たり前のように発達障害特性を悪しきもの、嘲笑されるべきものとして描写していたら、おそらく私はもっとスティグマを内面化して、大きな物語に飲み込まれていたのだと思う。なお、「ボクの彼女は発達障害」は長らく電子書籍のみでの販売であったが、2024年9月に紙で復刊されたのでぜひ読んでみてほしい。自分たちのパンフレットもまた、次の世代の心を守る盾のひとつになれることを願っている。

3. 筑波大学・感性認知脳科学専攻での多様性の学び

初代制作メンバーの瀬戸川と私は「パンフレット屋さん」になってすでに3年の月日が経った。新しい運営メンバーとして大学院生2名を迎え、活動のなかで知り合った人も増えてきた。とはいえ、本来我々はモデル動物を使って心の基盤を探る神経科学の研究者であり、現在もパンフレットの活動とは別に、自分たちの研究活動を続けている。おそらく神経科学もその一部に含まれるであろう「人間科学」という文脈のなかで自分たちの活動を振り返ると、瀬戸川と私が所属していた筑波大学の感性認知脳科学専攻で学んだことが、パンフレット活動の原点であるということに気づく。感性認知脳科学専攻は、医学、生物学、障害科学、心理学、デザイン学、感性工学などの研究室が集まった学際専攻で、学問分野の垣根がほとんどないカリキュラムが特徴であった。分野横断型の大学院で長く過ごすうちに、前提や考えが違っても、話し合えばわかることを学んだ。デザインに関する授業から、人に何かを伝える時には見せ方がとても重要だということも知った。文字だけで埋まった私の初稿に、かわいいキャラクターが必要だと力説したのは、神経生理学を専門とする瀬戸川であった。大学院の実習で臨床医の教授がおっしゃっていた「発達障害がある子だって、サポートがうまく行けば、普通の優しい、いい子なんだよ」という言葉もまた、診断を受けた後の私の心を守ってくれた。

現代の社会の中で、科学的な言説は大きな力を持つ。理系の研究者にとっての科学的言説は、データを表現するためのひとつの形にすぎないとしても、障害当事者を含む一般市民からは、覆せない絶対的な事実として受け取られてしまうこともある。パンフレットの活動を始めてから、科学的言説が孕むスティグマについて語りあう機会もできた。臨床家の先生方が「ネズミの研究者なんかなんにもわかってない」と言って、発達障害、特に自閉

スペクトラム症に関する神経科学研究の表現に、一緒に怒ってくれることもたびたびあった。傷ついた心に寄り添ってくれる人のいることが嬉しかった一方で、ネズミの研究者のコミュニティで育った私は「なんにもわかっていない」同僚たちはちょっと言葉足らずなだけで、苦しむ人の助けになりたいと考えるやさしい人たちであることもよく知っている。だからいつか、臨床家も当事者も基礎研究者も一緒にやさしくてフラットな言葉で、障害について話し合える日が来るといいなと思っているし、基礎研究者が莫大な時間とリソースを注ぎ込んで完成させた研究の成果を、本当に困っている人の心を守れる形で発表することができるようになるために、貢献したいと思っている。もし私たちがそのような未来を切り開くことができたなら、恵まれた環境で学際的な教育を受けることのできた幸運に、そしてその環境を作ってくださった先人たちに恩返しができるのかなとも思うのである。

特集 2 人間科学とは何か

「人間科学とは何か？」多様性と共生のパラダイムを構築する e スクールの学びー早稲田大学通信教育課程 20 年の実践ー

早稲田大学 加藤麻樹

早稲田大学の 100 周年記念事業として 1987 年度に創設した人間科学部の歴史が四半世紀に達した 2003 年度に人間科学部通信教育課程（e スクール）は設置されました。通学制と同じく人間環境科学科，健康福祉科学科，人間情報科学科の 3 学科で構成され，2023 年には 20 年を迎え，これまで延べ 2000 人以上の卒業生を輩出してきました。この 20 年間で情報通信環境は深化を続けており，インターネットを経由したコンテンツの画像と音声の品質は学生の修学の品質に直結することから，e スクールでも学生に提供する授業コンテンツの品質向上に向けた改善を繰り返してきました。

学生は，月曜日 5:00 から次の月曜日の 5:00 まで 1 週間毎に配信される授業コンテンツを視聴します。学生の視聴スケジュールの容易性と，彼らが授業に対して集中できる時間を考慮して，LMS 上では 1 コマが連続した授業動画ではなく，5，6 つのチャプターに分割されて配信されています。LMS 上では週ごとの理解度確認のためのレポート・小テストの提出を課すとともに，掲示板（BBS）を用いた質問・意見の交換を可能にすることでインタラクティブ性を持たせています。

e スクールの特徴のひとつは教員の授業コンテンツ提供にならび，1 クラス 30 人程度目安に修士以上の学位を有するスタッフとして教育コーチが配置され，学生の質問・意見等に応じて修学を支援する制度を設けている点です。教育コーチ就任にあたっては人事委員会，教授会の承認を経て学識が確認されるとともに，年に 2 回開催される FD 研修への出席が義務づけられています。この支援体制が功を奏した結果，e スクールの卒業率は約 6 割に達しており，通信制教育機関としては高い水準を保ってきました。

e スクールのもう一つの特徴として学年制ではなくレベル制をとっている点があげられます。一般的に通学制の場合は学生の入学語の年数に沿って学年あるいは年次を用いた進級制度をとりますが、e スクールでは取得単位数と必修科目履修数に一定の基準を設け、基準に到達するとレベル昇級できる仕組みです。学費を1 単位ごとに割り当てているので、5 年以上費やしても卒業要件となる124 単位の取得にかかる費用に差は生じません。初期レベルにおける平均履修科目数は図1 のようになっています。学生のうち社会人が占める割合が高い点で、柔軟に履修計画を立てられることから、単位取得の段取りはそれぞれの事情に合わせて多様化を可能としています。一定の単位取得後レベル昇級すると、人間科学にかかる基礎的な素養を身につけた段階で、ゼミへの所属が義務づけられています。ゼミによっては通学制のゼミと同時開講して多様な世代にわたる議論を課す場合もあり、幅広い分野の知見を背景にそれぞれの興味・関心に沿ったテーマで卒業研究を完成させていきます。

近年は高校卒業後すぐに就職しながら大学での学びを進める若い学生も少なくありません。結果として年齢層についても図2 のとおりの分布をしめしています。また職業も図3 のとおり多種多様にわたります。特に50 代の割合、会社員の割合がたかくなっており、いわゆるリカレント教育の一端を担っているといえます。その結果、LMS 上のBBS に集まる質問や意見にはそれぞれの働き方や価値観が反映されており、学生の居住地に基づくホームルームは入学後間もない新入生から卒業間近の学生まで修学経験が異なる学生同士の交流を可能にしている点でも、人間科学の学びに求められる幅広い視点に触れる機会となっているといえます。通信教育課程によって得られる人間科学の学びへの寄与が今後も期待されます。

参考資料

2025 年度 e スクール入学要項, 2024, 早稲田大学人間科学部通信教育課程

「人間を科学する／科学を人間(化)する」—再構築される「知」としての「人間科学」

東洋英和女学院大学 尾崎博美

1. 東洋英和女学院大学の学部・学科

東洋英和女学院大学の人間科学部人間科学科は、人間科学科は、本学の2つの学部のうち、人間科学部に属し、広く様々な視点から人間と社会について学ぶことを目的としています。人のこころや人間性について幅広く、学ぶことを通して、心理・教育・社会・宗教などのさまざまな問題を科学的に捉え、多様な人々と協働しながら問題解決を実現する人材を育成します。そのなかで、心理学、宗教学、社会学、教育学という4つの学問領域を中心として、領域横断的な学びであればこそ可能になる「人間科学」の学びを目指しています。

特に特徴的である点は、2年次以降に心理科学専攻と教育・人間学専攻の2つの専攻に分かれることです。学生は各自の興味・関心に合わせて選択し、必ず希望する専攻に配属されます。専攻制をとることで、領域横断的な学びと専門的な学びとの両立させた学修の在り方を提示しています。

2. 「英和スピリッツ」—見えないものが見えてくる

本学の学びの基本には、全学を貫く「英和スピリッツ」という教育方針があります。開学より掲げる教育方針として「英和式リベラルアーツ教育」があり、幅広い知識に根ざしたうえで専門的な学びにより、本当の教養を身につけてもらうという方針があります。この「英和スピリッツは、「誰かのためにまず私から始めましょう」というスローガンのもと、「自立心と呼び起こす」「成長を加速する」「好奇心に火をつける」「見えないものが見えてくる」の4つの柱で表されます。

特に、4つ目の「見えないものが見えてくる」は、先に述べた領域横断的な幅広い視野をもつ学びと専門的な学びの双方を身につけることで、日常的な生活風景のなかで「当たり前」に接するさまざまな事柄のなかに、新しい発見や課題設定を行いうる視点をもつこと

を意味しています。近年の社会における科学技術の革新や情報体系の変化などは、社会や生活の質自体を変化させる大きな可能性を持っています。しかしながら、どのような新物質・新技術等の発見や発明があったとしても、それを使用し活用していく主体が「人間」であることに変わりはありません。つまり、テクノロジーやシステムの利用者である「人間」自身が、旧来の視点を更新して新たな目で社会の課題や可能性を見いだしていくことが、「英和式リベラルアーツ」が目指すところです。自然科学、社会科学、人文科学等の様々な分野を含む「人間科学」はそうした視点を形成する学びの土台を提供してくれるものです。

3.人間を科学する—3 人称の視点？

ここで、人間の「視点」を問う論点の一つとして、3 人称と 2 人称とのそれぞれの視点を考えてみます。しばしば科学は、「行動観察をどのように行うかについての学生の訓練マニュアルにおける第一原則は、記述は解釈と分けるべし」(Reddy 2008) と指摘されるように、主観を離れて客観的に事物をみる視点を求めます。これはデータや客観的事実に基づく視点を求める意味において有用であることは間違いありませんが、その一方で、学生たちに「観察者」的視点を求め、その結果として、学生たち自身を社会の「傍観者」として育成してしまう危険性も有しています。つまり、情報を多く持っても社会の出来事を「自分ごと」としては捉えられない存在を育ててしまう危険性です。

この危険性は、人間を「象牙の塔の住人にする」教育の在り方に対する批判においても指摘されています。象牙の塔の住人達は、多くの情動的知識をもっている一方で、①自らに与えられる知識に対する批判的思考がない、②現実世界の諸問題を解決することを強く望まずに判断（思考）する、③他者に対する親切的な振る舞いや他者の幸福への関心を持たない、といった問題点があることが指摘されています (Martin 1992)。いうなれば、科学を理解するが、科学の用途を想像したり心配したりすることはないわけです。ここでも改めて、新しい技術は新しい視点で用いる文脈を持ち得る「人間」がいてこそ「科学」として生きることが示されます。このことは、まさに「人間科学」を通じた教育が対峙すべき課題、そして「人間科学」がもちうる可能性をも示唆しています。

4. 科学を人間（化）すること—2人称の視点から Educated Person を問う

それでは、2人称の視点から「人間科学」の可能性を検討してみましょう。近年の「ケアリング論」においては、「人間」は本来的に「ケアし、ケアされたいと思っている」存在であると主張されます（Noddings 1987）。つまり、「人間」が何らかの思考や判断を行う際には、表面的には「一人」で行っているように見えても、実際には自分にとって意味をもつ人物・事柄・観念等の「関係性」に基づいて思考し行動しているということです。この意味において、人間の思考や行動は、自分自身と切り離された世界にある基準に沿ってではなく、むしろより身近な世界とのつながり（ケアリング）において方向づけられている、といえます。

さらに、人間の「学び」においても、3人称の世界の学びは、それを媒介する2人称の世界を通して行われるとする指摘がなされています。これは、人間が身近な2人称の世界に閉じこもる存在では決してなく、2人称の世界を通して3人称の世界に触れることが可能な存在であることを提示しています。それと同時に、いわゆる物理法則のような、普遍的な法則とみなされるものについても、それがいかなる意味を持ち得るかは、当該の学習者を取りまく2人称世界の影響が大きいことをも意味していると言えます。

5. 再構築される「知」としての「人間科学」

以上のことを踏まえますと、「人間」と「科学」の双方を私たちはより有機的な関係性に基づくものとして改めて捉え直す必要があることが示されます。「自律的な人間」として思考したり行動したりすることは、自らを傍観者の立場において孤立して判断したり行動することではなく、むしろ自らが獲得し形成する2人称世界の意味連関のなかで判断したり行動したりすることとして捉えられます。それは、「教育」を通して、3人称的視点の獲得と訓練（「理論」の獲得）を経験すること、そして2人称的实践への参加と理解という学びの獲得と訓練の必要性を示しています。

上記の見方に基づくならば、「人間科学」は人間と社会の双方に対する observation と participation の包括的統合を進めていく学びを実現しうる領域であると言えます。こうした「人間科学」の学びを通して、学習者たちは次第に自分自身も社

会を構成する一部であると同時に社会に影響を与えうる重要な変数の一つでもあることを「実感」することができるようになることを想定できます。

本学における人間科学の学びが示す「主体的に学び、人や社会と関わり、具体的な行動に移す態度」は、そうした人間の新たな「知」の在り方を提案しているのです。

参考文献

・Martin, J. R., 1992, *The Schoolhome: Rethinking Schools for Changing Family*, Harvard University Press〔邦訳：邦訳：ジーン・R・マーティン著、生田久美子監訳、2007年『スクールホーム—ケアする学校』、東京大学出版会〕

・Noddings, N., 1984, *Caring: A Feminine Approach to Ethics & Moral Education*, University of California Press〔邦訳：ネル・ノディングズ著、立山善康他訳、1997年『ケアリング 倫理と道德の教育—女性の観点から』晃洋書房〕

・Reddy, V., 2008, *How Infants know minds*. Harvard, University Press〔邦訳：ヴァステヴィ・レディ著、佐伯胖 訳、2015年『驚くべき乳幼児の心の世界：「二人称的アプローチ」から見えてくること』、ミネルヴァ書房〕

話題：大阪大学大学院人間科学研究科が進める「DE&I 実装キャンパスプロジェクト」

大阪大学 齊藤弥生

1. 「DE&I 実装キャンパスプロジェクト」とは

大阪大学では 2022 年開始の第 4 期中期計画に加え、さらにその先も見据えた中長期的な経営ビジョンとして「OU (Osaka University) マスタープラン 2027」を策定しました。2022 年には OU マスタープランの実現を加速化しようと、総長のイニシアティブにより「OU マスタープラン実現加速事業」の学内公募が行われました。私たち人間科学研究科では初回公募の 2022 年には「社会学共創エコシステムの構築」(2023～2027 年度)、第 2 回目公募の 2023 年には「社会学共創による Wellbeing で Inclusive なキャンパスづくりの全学展開に向けた試行」(2024～2026 年度) というテーマで事業提案を行い、2 つとも採択されることとなり、現在は 2 つの大プロジェクトを進めています。ここでは「社会学共創による Wellbeing で Inclusive なキャンパスづくりの全学展開に向けた試行」(通称:「DE&I 実装キャンパスプロジェクト」、以下、人科 DE&I プロジェクト) をご紹介します。

大阪大学には、「大阪大学ダイバーシティ&インクルージョンセンター」が中心となって、2016 年に『大阪大学男女協働推進宣言』、2017 年に『大阪大学「性的指向 (Sexual Orientation) 」と「性自認 (Gender Identity) 」の多様性に関する基本方針』、2020 年には総長以下、経営層による「イクボス宣言」(※「イクボス」とは部下や同僚等の育児・ワークライフバランス等に配慮、理解のある上司を指す)、 「SOGI アライ宣言」(※「アライ」(ally) は、LGBT のことを理解し、支援しようとする人のことを指す) を公表し、多様な性的指向・性自認、国籍や文化的背景、年齢、価値観、障がいの有無等にかかわらず全ての学生・教職員が尊重される環境の整備に取り組んでいます。さらに大阪大学ではこれらの『宣言』と『基本方針』を継承しつつ、新たな段階へ発展させるため、『大阪大学ダイバーシティ&インクルージョン (D&I) 推進宣言』を示し、多様性が真に受容され、尊重される環境整備を促進・徹底することを宣言しています (大阪大学 HP より) 。

人間科学研究科は大阪大学ダイバーシティ&インクルージョンセンターと協働し、特に障がいのある人たち、しんどい状況にある学生、職員、教員を支え、すべての構成員それぞれが持つ力を十分に活かすことができるキャンパスづくりを目指す取り組みを提案しました。

2. なぜ障がいに目を向けるのか

(1) 世界的潮流に遅れをとる日本の障がい者支援

「完全参加と平等」をテーマにした 1981 年の国際障害者年は、日本の障がい者施策にも影響を与えましたが、障がい者支援の領域で今日につながる様々な改革が始まったのは 2000 年代以降ともいわれます。「障害者権利条約」批准とともに、日本でも障がいの地域生活を支援する法律として、障害者総合支援法（2008）、障害者差別解消法（2013）が成立し、障害者雇用促進法（2009）改正では障がい者の法定雇用率は現在の 2.4%から 2026 年度には 2.7%に引き上げられることが決まっています。しかし国際比較において、日本の障がい者支援に対する社会的支出は極端に少なく、国連からは「自立した生活及び地域生活への包容」(障害者権利条約 19 条)について、日本では障がい者が自立した地域生活を送る権利が保障されていないとし是正勧告を受けています（2022 年）。

大阪大学でも 2014 年度から合理的配慮を必要とする学生に対する支援が始まり、キャンパスライフ健康支援・相談センター（以下、HaCC）による支援体制が整備され、また部局との連携も行われるようになり、合理的配慮を必要とする学生への対応件数は増えています。大学における障がい者雇用では、大学構内の清掃業務や環境保全に従事する「エコレンジャー」、工学研究科「工学ピカース」等、職種は限定されているものの雇用機会創出の取り組みが始まっています。DE&I に対する大学の取り組み姿勢とその環境整備は世界からも、地域社会からも問われており、人間を研究テーマとする学生や研究者が集まる人間科学研究科ではこれまでの経験を活かしてモデルを示していくことが求められると感じています。

2) 社会的包摂の考え方—誰でも支援が必要な「とき」がある

社会的包摂(social inclusion)とは、障がいや疾病があっても、公的支援や地域資源等の活用により、孤独や孤立、排除や摩擦から援護され、健康で文化的な生活が実

現できるよう、社会の構成員として包摂し支え合うという考え方です。社会的包摂の対象は社会的に弱い立場にある人と考えがちですが、現代社会では誰もがその対象になりうるという視点が重要です。しんどい状況は決して他人ごとではなく、誰でも一時的に支援を必要とする「とき」があると考える必要があります。

WHO(2022)によれば、先進国のなかで日本の自殺死亡率は最も高く、若者が自殺する理由には学校生活、家庭、経済事情等があげられています。また内閣府は、ひきこもりの状態にある人は全国に146万人いて、15～39歳の2.05%、40～64歳の2.02%と推計しています(2023年)。雑な計算ではありますが、仮に大阪大学の学生数約23,000人とみれば約460人強の学生にその可能性があるともいえます。

大阪大学では障がいのある学生(障害者手帳所持者)と合理的配慮を要する学生(手帳所持者+医師の診断書がある人)支援では、医師や公認心理士等の専門職を配置するHaCCが大きな役割を果たしています。また工学研究科は2014年にレジリエンス教育部門を開設し、相談事業と「レジリエンス・サポート・ルーム」を通じて、学生、職員、教員すべてを対象とした支援で成果を上げています。さまざまな課題を抱える学生の数は増加していますが、多くの場合、教員はケアや支援の専門知識を持たず、真面目な教員ほど課題を一人で抱え込んでしまい、健康を害するケースもみられます。また複雑な課題の解決に、教員が自己判断で取り組むことは必ずしもよい結果を招くとはいえ、同時に膨大な研究時間が費やされる状況が続きます。このような状況はハラスメントのリスクも高めることにもつながります。多様化するキャンパスの状況のなかで、誰もが能力を発揮ことができ、身体的にも、精神的にも健康に過ごすことができる環境づくりが急務と考えています。

3. プロジェクトの3本柱—人科でなければできない、人科の強みを活かす!

DE&I実装キャンパスプロジェクトは3つの事業で構成されており、それぞれが人科の強みを活かせる内容になっています。

強みの一つめは、人科には臨床心理士、公認心理師養成プログラムを持ち、心のケアの領域で働く専門職を輩出しています。また障がい当事者の組織や課題解決を実践する団体や組織との協働や共同研究の実績があります。

強みの二つ目は、大阪大学キャンパスのある北摂地域（吹田市、豊中市、箕面市）は全国的に市民活動が活発な福祉先進地域である上に、人科には各種委員会（市教育委員会、市福祉関連委員会等）で学識者として委員を務める教員やフィールドワークを行う教員や院生が多く、地域社会と協働してきた蓄積があり、この課題に対して助言や協力をいただくことができます。

北摂地震（2017）では自治体避難所で留学生たち、コロナ禍でアルバイトを失った学生たちがフードバンクで地域の方々に助けていただきました。その経験から子どもの学習支援や高齢者活動への協力を始める学生がいます。メンタルヘルスで苦しむ学生が、地域で行われているひきこもり支援に研究活動として参加して、自ら元気を取り戻す等の例もあります。

続いて3つの計画を順にご紹介します。

<計画1> 人科版「レジリエンス・サポート・ルーム」の開設－専門職の力、地域の力、卒業生の力も借りる！

キャンパスライフで発生する多様な相談に対応できる相談室を「レジリエンス・ルーム」と称して開設し、学生と教職員の包括的支援を展開することを目指しています。次の3点が柱です。

第一に、人科版レジリエンス・サポート・ルームには、公認心理師等の専門職1名を配置し、全学のHaCCに所属する精神科医、カウンセラー等の専門職との連携をはかり、しんどい状況にある構成員を支援します。公認心理師・臨床心理士養成コース卒業生・院生の協力を受けることができます。

第二に、レジリエンス・サポート・ルームには遠隔授業装置を設置し、大教室での授業に出にくい学生の受講を可能とします。レジリエンス・サポート・ルームは、専門職のアセスメントに基づき、登校しにくい、人に会いにくい等の諸事情を抱える学生の「居場所」機能も果たします。

第三に、人科内の支援体制見直しと運営委員会の組織化を行います。障がい学生支援委員会、学業支援チーム、合理的配慮委員会、教務委員会等、関連委員会の縦割り組織を整理し、研究科長筆頭の運営委員会を組織することを検討しています。、レジリエ

ンス・サポート・ルームだけに責任を押し付けることなく、DE&I の視点から人科全体で課題解決のしくみをつくります。

第四に、人科では社会学共創を部局のミッションとしていますが、学生の抱える困難や課題を受け止め、解決につなげる仕組みを社会学共創モデルで試行したいと考えています。人科ではこれまでに 22 団体とオムニサイト協定を結び、さまざまな研究プロジェクトを行ってきました。ケースによっては、地域の力をお借りしながら、学生にとっての地域社会での「居場所」確保の可能性を考えていきます。

<計画 2> DE&I キャンパスを実装する「ユニバーサル・カフェ」の開設 – 地域の障がい者団体とともに！

(写真 1) リンネ大学キャンパスにある「カフェ・トゥーバン」(スウェーデン)



同じ世代の若者どうしが“普通に出会える空間”

DE&I といいながら、現実には障がいのある人と接したことがない学生や教職員は意外と多いと思います。障がいのある人たちの理解には、一緒に過ごす時間と空間を持つことが大事であり、相互理解の近道と考えます。例えば、人科と部局間学術協定を結ぶリンネ大学（スウェーデン）のキャンパスには、軽食ができるカフェがあり、知的障がいのある若者 5-6 名が専門職員と共に働き、おいしいサンドイッチやパスタサラダを提供しています（写真 1）。このカフェは障がいのある若者の雇用を生み出すことはもちろん、学生や教職員にはおいしいランチを食べることができ、ダイバーシティを感じるうえでの自然な環境をつくることができます。

また大学の障がい者雇用のあり方も問われており、単に法定雇用率を達成するだけでなく、キャンパス内のさまざまな場所での就労の可能性を検討し、雇用のモデルを社会に示していくことが求められます。

私たちのプロジェクトでは、キャンパス内に、誰もがランチを食べることができ、誰もが従業員にもなれる、常設のユニバーサル・カフェの設置を目指します。その準備として、「DE & I カフェ」と称して、月に1回ではありますが、地域の障がい者団体の皆さんによるパンの販売を実施しています。障害のある人たちが運営するベーカリーから、無添加で焼きたてのパンがキャンパスに届けられ、学生、教職員に好評です。また回数を重ねるごとに、障がい者当事者の皆さんとのなじみの関係がつけられているように感じます。大阪大学には吹田、豊中、箕面と3つのキャンパスがありますが、現在は吹田2か所で実施し、秋からは豊中で、次年度は箕面でも実施し、すべてのキャンパスでの実施し、その継続ができるしくみづくりを考えています。

〈計画3〉 DE & I 研究の展開—人文社会系の大学院教育を魅力的なものに！

大阪大学では大学院教育において、横断型プログラムを取り入れ、文理融合型の研究領域の展開に力を入れています。その一環で、2023年4月から大阪大学人文社系オナー大学院プログラムが開設され、人間科学研究科、人文学研究科、法学研究科、経済学研究科等、人文社会科学系部局が協働し、大学院後期課程のプログラムを運営しています。人間科学研究が中心となり、フィールド調査を重視する「社会学共創ユニット」は2023年度にすでに開始されていますが、2024年4月には「DE&I デザインユニット」を新設し、「DE&I スタディーズ」の開発と国際展開に勤めていきます。人科では15年以上にわたり、全学1年生対象の「ジェンダーと社会」を人科教員10名余+他部局教員で提供し、また教科書も刊行しました。

(写真2) フランクフルト応用科学大学自立生活研究センター (ドイツ)



補助器具とテクノロジーについて、社会福祉学部と工学部の学生たちが議論

写真2は大阪大学と学術交流協定校を結ぶフランクフルト応用化学大学自立生活研究センターの授業の光景ですが、補助器具やウェルフェア・テクノロジーの設備を持ち、理系の学生と障害学や社会福祉学を専攻する文系の学生が利用者の視点から日常的に議論し、新たなアイデアや製品を生みだしています。DE&Iは人文社会学系の学生だけでなく、将来、世界で活躍する研究者を目指す若者すべてが理解を深めてほしい基盤領域です。人科研究者らがこれまでの国際共同研究で構築した研究者ネットワーク、世界の25言語を有する外国語学部・人文学研究科と協働することで研究のさらなる蓄積と広がりが期待できます。DE&Iでは欧米諸国が注目されがちですが、アジア諸国の研究者とのネットワークづくりにも着手していきたいと考えています。

大阪大学で始まったばかりの小さな「DE&I実装キャンパスプロジェクト」で、他大学ですでに実施されていることばかりかもしれません。全国の人間科学部ネットワークでDE&Iのあり方を議論し、その考え方を広めていくことができれば素晴らしいと思いますし、それができるのが「人間科学部」だと思います。



Human Sciences

Intercollegiate Network

全国人間科学系部局連携ネットワーク
2024年度年次大会

フォーラム人間科学

日時：2024年12月7日（土）13:00～

会場：筑波キャンパス第二エリア 2A棟4階 2A410教室

* 公開シンポジウムは対面及びZoomによるハイブリッド形式

プログラム

フォーラム人間科学

13:00～15:45

公開シンポジウム第1部「人間科学の最前線」

- ・眞鍋 昇先生（大阪国際大学）
「多様な実践的教育・研究を通じた多面的に社会貢献する人材の育成」
- ・田代 裕一先生・河谷はるみ先生（西南学院大学）
「西南学院における高大連携プログラムと教育実践」

公開シンポジウム第2部「人間科学とは何か」

- ・徳山 孝子先生（神戸松蔭女子学院大学）
「人間科学に期待される最適化社会」
- ・相松 慎也先生（武蔵野大学）
「『人間科学とは何か』を考える」

申込フォーム



全国人間科学系部局連携ネットワーク年次総会 16:00～16:45

情報交換会 於：筑波大学内レストラン 17:00～18:00

- * 総会はハイブリッド形式、全国人間科学系連携ネットワーク部局関係者のみ
- * 情報交換会は当日会費5,000円を頂戴します。

申し込み期限：11月22日（金）

お問い合わせ：筑波大学人間学群事務室
✉ ningen-gakugunjimu@un.tsukuba.ac.jp

News : HUS-IN ウェブサイトとロゴマーク

このたび、HUS-IN（全国人間科学系部局連携ネットワーク）のウェブサイトが完成しましたのでお知らせいたします。

<https://hs-inet-j.humsci-waseda.jp/>

第一回フォーラム人間科学第一回大会の情報や第一回の本会報などの記録、また次回以降の大会の情報なども当サイトで発信していくこととなりますので、どうぞ皆様に御周知いただき、ご活用いただきますようよろしくお願いいたします。

さらに、HUS-IN のロゴマークが完成しましたのでお知らせいたします。デザイン・コンセプトとしては、人間科学の「2つの知」から成る新社会というテーマから着想し、「人」の字をモチーフとしました。下側左右の突起は、それぞれ「学問知」と「社会に偏在する知」を表しています。その二つが交わり生まれた上部の突起は人の頭のようにも見え、新しい社会を担う次世代の学生等を表現しています。関連学会での発表や大学のウェブサイトでの広報などにご活用いただけましたら幸いです。なおロゴ・データはネットワーク web サイト（上記）の「アーカイブ」コーナーよりダウンロードできます。



Ver.1

HUS-IN



Ver.2

Human Sciences
Intercollegiate Network



Human Sciences
Intercollegiate Network

Ver.3



HUS-IN

Ver.4

編集後記

小誌は、去年の第一号に引き続き、去年度の人間科学フォーラムにて登壇いただいた先生方にご寄稿いただき、また大阪大学大学院人間科学研究科の齊藤弥生先生から「DE&I 実装キャンパスプロジェクト」の話題をご提供いただくことで、無事発刊することができました。ご協力いただいた先生方には改めまして御礼申し上げます。

また今年度のフォーラムは、12月7日に筑波大学にて開催されます。関連部局の先生方や学生さんはもちろん、それ以外の皆様にも参加していただければと存じます。できましたら、是非とも、多くの方に周知していただきますようお願いいたします。（文責・近藤）

会報「人間科学」 第2巻 2024年11月11日発行

発行元：全国人間科学系部局連携ネットワーク

本書の掲載内容（文章、写真、画像など）の一部および全てについて、事前の許諾なく無断で複製、複写、転載、転用、編集、改変、販売などの利用を固く禁じます